

芝原宏治 著

錯誤の意味論

類似性の関係変換分析

海鳴社

芝原 宏治 著

錯誤の意味論

——類似性の関係変換分析——



海鳴社

【著者】 芝原 宏治 (しばはら こうじ)

1964年 東京教育大学文学部卒業

1969年 東北大学大学院文学研究科博士課程中退

現 在 大阪市立大学文学部教授

専 攻 英語学

著 書 『錯誤のレトリック』(1992年, 海鳴社)

『レトリック論』(1982年, 私家本)

錯誤の意味論

1995年11月20日第1刷発行

発行所 (株) 海 鳴 社

〒101 東京都千代田区西神田 2-4-5

電話: (編) 03-3234-3643 (Fax 共通)

(営) 03-3262-1967

振替口座: 00190-3-31709

組版: 海鳴社 印刷: 大志印刷

製本: 三水舎

文部省助成図書

出版社コード: 1097

ISBN4-87525-171-8

Copyright: 1995 in Japan by Kaimei Sha

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

はしがき

本書の目的は、1980年代半ばごろから私が諸処で提示してきた「関係の錯誤」というアイデアをよりの確なことばで言い止めること、および、「類似性」という単語で語られてきたものを「関係の錯誤」という視点から見直し語り直すことにより、アメリカ流の認知意味論とは異なる認知意味論が可能であることを示すことである。

1995年の2月に入ったか入らないかというころ、某局で放送されたラジオニュースの中に、異様な表現を聞いた。一字一句正確に再現できるかどうかはわからないが、肝心なところは、アナウンサーの口調にいたるまで鮮やかに思い出すことができる。聞いたことばは、おおよそ、次のとおりである。

真珠湾で多数のアメリカ人の命を奪った日本人の記念碑を作る計画には賛成できない。

日本語を母語とする人がこの文を素直に読むなら、真珠湾を爆撃した日本人兵士群のために誰かが記念碑を建てようとしていて、別の誰かがそれに反対しているのだと、十人が十人とも思うであろう。しかし、私が聞いたニュースは、真珠湾攻撃に直接かかわるものではなかった。

ニュースは、1992年10月にアメリカ合衆国ルイジアナ州で銃殺された日本人留学生服部剛丈（よしひろ）君にかかわるもので、銃による被害をなくそうという願いをこめて建てられようとしていた石碑に剛丈君の名を刻むことができなくなったことを伝えたものである。したがって、アメリカの一在郷軍人会の代表者が語ったことばとして報じられた上記の文は、真珠湾を攻撃した日本人兵士のための碑を建てることではなく、銃の犠牲になった服部君のための碑を

建てることに反対する意見を表わしていたことになる。

同じ構造の文と比較してみても明らかだが、引用した文は、単独で読むかぎり、上のような意味には理解できない。仮に「真珠湾で多数のアメリカ人の命を奪った」のが1941年に生きていた日本人すべてであるとしても、服部君は、その一員ではない。したがって、その服部君にかかわることばとして引用文を読むのは、ほとんど考えられないことであるように思われる。にもかかわらず、問題の文を、アナウンサーは前の段落で述べた意味で読んだ。明らかに、ニュース原稿の起草者は、多くのアメリカ人を死に至らしめた日本人集団と、銃で殺害された日本人高校生とを、同じざるですくいとるような表現をしてしまったのである。

しかし、上記の文は、在郷軍人会の代表者の心理を正確に反映している。この文に細部に至るまで対応することばを彼が語ったとは考えられないが、代表者は、服部剛丈君を、真珠湾攻撃に参加した兵士のどの一人とも区別できなかったはずだからである。言語的にはともかく、心理的には、剛丈君の上に「ジャップの兵士」を重ねて、退役軍人は剛丈君を見ていたのである。

なんということかと、私たちは思う。アメリカ人に殺害された日本人高校生と、アメリカ人の命を奪った日本人兵士とを混同するのは、錯誤の極みである。しかし、立場が変れば、誰もが在郷軍人会の代表者と同じような考え方をするであろうことを、私たちは知ってもいる。不幸なことだが、その意味では、私たちには退役軍人の心の動きを理解する下地がある。あるからこそ、上に引用したような表現が、ことばに厳しい放送局の電波網を通して全国に流されるという現象も、起きるのである。

1992年に海鳴社から出版された拙著『錯誤のレトリック』を自分で何度も読み返ししながら、私は、先ほど引用した文に見られるような、言語表現に現れた錯誤を、「類似性」という単語を常に念頭に置きつつ、繰り返し考えてみた。本書はその結果であり、市川亀久彌氏の術語を使って表現するなら、『錯誤のレトリック』を「等価変換」したものが『錯誤の意味論』である。

本文では書いていないが、「関係転写」を語るために第Ⅰ部で導入する「比較の四項」は、「意識の四項」とでも呼ぶべき、より一般的な概念に吸収されるかと思われる。「意識の四項」とは、たとえば、「国際結婚」という表現を成

立させる四つの項のことである。ここでは、結婚する男性と女性、男性が所属する国、および女性が所属する国という四つのものが、話者によって意識されている。注意すべきは、この表現に関して、国と国が結婚するようでおかしいという意見があることである。国と国について用いられるべき「国際」が、人と人が行う「結婚」を限定しているのは不合理だというわけであろう。このような意見が存在する事実、および、それにもかかわらず「国際結婚」のような単語が使用される事実、は、「比較の四項」が孤立した概念ではないこと、および、第Ⅱ部で議論する「直接類似関係」と「間接類似関係」の区別が場当り的なアイデアではないことを示している。今にして思えば、関係転写の実在性を証明しようとした本書第Ⅰ部と第Ⅱ部において、私は、いささか力みすぎたようである。

力みすぎたと言うなら、レイコフ流のメタファー論を批判した箇所でも、私は力みすぎたかもしれない。本書では大きく取り上げることをしなかったが、Lakoff (1990) の “invariance hypothesis” (→第11章注8) は、言うなれば、アメリカ版の等価変換論である (→付説)。それを提示することになるレイコフが、ジョンソンとともに、「類似性に依存しないメタファー」というものを主張したのは、大きな皮肉であった。理論としては、無論、発明の過程と発見の過程を同じ「等価方程式」で説明しようとした市川理論 (→第11章第4節) のほうが、一貫性がある。欧米流の記号列を見慣れた目にそれがどのように映るかというのは、別問題である。そうしたことも、今なら気負わずに語れそうな気がするのだが、「おぞき苦闘の告白」も、一つの説明法かと思う。

本書で取り上げた例文類の中には、相当に固く響くものと、この種の書物には不釣り合いなほど柔らかく響くものがある。言語というものが生活のほとんどすべてのレベルに浸透している以上、証拠として提出する用例は様々なところから取り出せるし、また、取り出すべきだと考えて、種類を限定せずに拾っていったら、このように硬軟入り交じったものが集まった。どう工夫しても堅苦しくなりがちな議論を、せめて、ほのかな笑いで和らげることができたらと考えたこともないではないが、私としては、奇をてらったわけでもなければ、特別な効果を意図したわけでもない。

錯誤の認知意味論とも言える本書は、序章と18の章および付説によって構成

され、18の章は5部に分けて提示されている。各部各章の内容は巻末の「要約」にまとめてあるので、本書の全体像を大づかみにつかみたい読者は、まず、そちらを見ていただきたい。

執筆に際しては、数冊の訳書を利用させていただいた。訳文を横目でにらみながら私自身が訳した箇所があるのは、力点の置き方などの関係で、そのまま引用すると論旨が不明確になる恐れがあったからである。訳業を軽んじたわけではけっしてない。なお、私の一存で加えた引用文中の注記は、すべて、角括弧 [] の中に入っている。訳者による注記と区別されたい。

多忙時に原稿を読んで厳しくも温かい助言をくださった大阪市立大学文学部の栗山稔教授（英文教室）、森本英夫教授（仏文教室）、および宮坂豊夫教授（独文教室）に厚く御礼申し上げる。本書における誤りは、すべて、私によるが、三氏のご配慮がなかったら、本書は実現しなかったであろう。

（1995年3月10日）

目 次

はしがき	i
------	---

序 章	1
-----	---

- 1 I・A・リチャーズの「類似」 1
- 2 ブラックの「類似」 6
- 3 レイコフとジョンソンの「類似」 7
- 4 考えるべき「類似」 9

注 11

第 I 部 比較の四項

第 1 章 とらえにくい類似	17
----------------	----

- 1 グライス理論に現れた類似説 17
- 2 レイコフとジョンソンの類似説批判 20
- 3 遊離した類似 23

注 26

第 2 章 古典的類似・家族類似・未確認類似	28
------------------------	----

- 1 範疇形成に関する二つの考えかた 28
- 2 「ゲーム」の論 30
- 3 未確認類似 36
- 4 「観点の変革」と「醜い家鴨の仔の定理」 38

注 41

第3章 比較の構造	44
1 D比較の二項	44
2 比較の四つの型	48
3 英語の用例	50
注	54
第4章 類似の強制	55
1 S比較の二項	55
2 類似強制の仮説	58
3 仮説の検証	62
3.1 オースティン説と比較して	62
3.2 レイコフ説と比較して	67
4 要約と確認	74
注	76
第Ⅱ部 関係の錯誤	
第5章 関係転写	79
1 表似述語の二つの用法	79
2 ②→①方向の錯誤	86
3 言語の境界を越える錯誤	89
3.1 英語の表似述語	89
3.2 日英語の表似名詞	91
4 関係転写型の錯誤	93
5 メタファーと関係転写型の錯誤	98
注	101
第6章 錯誤を誘発する関係	102
1 直接類似関係と間接類似関係	102
2 連結関係	104
3 メトニミー関係の仮説	107
4 隣接性と関係転写型の錯誤	110
注	113

第7章 関係転換	115
1 連結類似	115
1.1 連結類似の定理	115
1.2 連結類似の系	118
2 関係転換型の錯誤	119
3 メトニミーと関係転換型の錯誤	126
4 メタファーと関係転換型の錯誤	128
注	129

第8章 関係強化	131
1 普通の錯誤	131
2 直接類似関係の強化	133
3 直接類似関係と間接類似関係の境界	136
4 言語表現に現れた関係強化型の錯誤	140
注	144

第Ⅲ部 メタファーと関係の錯誤

第9章 認知言語学派のメタファー論と関係の錯誤 I	149
1 「類似」と「理解」に関する素朴な疑問	149
1.1 「類似」に関する疑問	149
1.2 「理解」に関する疑問	151
2 言語と思考	152
3 「理解」のトリックと関係の錯誤	155
3.1 重ね理解の二つの方式	155
3.2 トリックの種としての「理解」	159
3.3 「理解」のトリックと混同の話術	165
注	166

第10章 認知言語学派のメタファー論と関係の錯誤 II	177
1 「類似」のトリックと関係の錯誤	177
2 「類似」に関する三つの問題	180

- 2.1 類似点を創り出すのはメタファーだけか 180
- 2.2 創り出す方式に違いはあるか 182
- 2.3 「類似」のトリックはなぜ見破られなかったか 186
- 3 「類似」のトリックと混同の話術 188
- 注 190

第11章 メタファーと関係の錯誤……………192

- 1 メタファーの錯誤分析 192
 - 1.1 メタファーと関係強化型の錯誤 192
 - 1.2 メタファーと関係転写型の錯誤 195
 - 1.3 メタファーと関係転換型の錯誤 199
- 2 メタファーと直接類似 203
- 3 メタファーに関する三つの問題 205
 - 3.1 直接類似関係に依存しないメタファーは存在するか 205
 - 3.2 転換強迫力に依存しないメタファーは存在するか 206
 - 3.3 転換強迫力のみに依存するメタファーは存在するか 210
- 4 類似問題再考 214
- 注 219

第Ⅳ部 メトニミーと関係の錯誤

第12章 認知言語学派のメトニミー論と関係の錯誤 I……………225

- 1 「概念メトニミー」に関する一つの問題 225
- 2 二つの答 227
 - 2.1 提示できそうな答 227
 - 2.2 レイコフとジョンソンの答 228
- 3 概念メトニミーの指示機能と投射機能 230
- 4 メトニミーの基盤 233
- 注 237

第13章 認知言語学派のメトニミー論と関係の錯誤 II……………241

- 1 テイラーの問題 241
- 2 「メトニミー連合」 243

- 3 類似・共起・メトニミー 245
 - 3.1 テイラー案の眼目 245
 - 3.2 「メトニミー」と「概念メタファー」 247
- 4 提起すべき問題 251
 - 注 254

第14章 メトニミーと関係の錯誤……………258

- 1 言語表現としてのメトニミー 258
- 2 商品としてのメトニミー 264
- 3 同定法 268
 - 注 270

第V部 錯誤の展望

第15章 錯誤の伝令……………273

- 1 錯誤問答 273
- 2 「力」の正体 277
- 3 特性投射・特性廃棄 280

第16章 笑いの錯誤分析……………283

- 1 黒澤の笑い 283
- 2 飛躍と笑い 286
- 3 認知の因果関係 289

第17章 文法と関係の錯誤……………291

- 1 チョムスキーの「本」 291
- 2 「同一性の条件」とナンバーグ説 293
 - 2.1 二つの「本」とナンバーグ説 293
 - 2.2 ナンバーグ説の難点 297
- 3 変換コマンドによる説明 299
- 4 様々な表現に現れた関係の錯誤 301
 - 注 306

第18章	錯誤の認知	310
1	「書かれていること」と「書かれていないこと」	310
2	「回復不可能な削除」というアイデア	315
3	削除と投射	318
4	錯誤の相互強化	323
	注	326
付	説 類似の創造・メタファー写像・等価変換	329
要	約	335
参	考文献	343
索	引	349

序 章

1 I・A・リチャーズの「類似」

言語学者の間で「類似」(similarity)という概念が問題にされるとき、しばしば提示されるのは、「家族類似」¹⁾(family resemblances, Familienähnlichkeiten)という術語である。「家族類似」は、もと、L. Wittgenstein の用語であり、現代の研究者も、その意味を説く際に、「ゲーム」に関する彼のことばを、まず引用、あるいは想起する。本書では、いま述べたウィットゲンシュタインの論説を第2章で取り上げることになるが、それは、「類似性」というものについての考え方を一変させる、鋭い発言である。そして、この発言が及ぼした影響は大きい。けれども、類似性について厳しく考えたのは、実は、ウィットゲンシュタインばかりではない。メタファー研究者の間では「相互作用説」(interaction theory)を提唱した人として語られることの多い I. A. Richards も、また、「類似」という概念について深く考えた人物の一人である。

1936年に出版された *The Philosophy of Rhetoric* (『新修辞学原論』、石橋幸太郎訳)の第V講で、リチャーズが次のように述べて相互作用説を展開したことは、よく知られている。

これ〔重要なのは主意のみであるという18世紀の仮説〕に反して、現代の学説は第1に、隠喩のもっとも重要な用法の多くについては、媒体と主意とが共存して始めて意味を生ずるのであり、かつ、意味は両者の相互作用なくしてはえられないものであるから、意味と主意とは明瞭に区別されねばならない、と抗議するであります。つまり、媒体は、通例、主意の単なる文飾として、主意にそれ以外の影響を与えないというようなものではなくして、媒体と主意とは、協働によ

って、両者のいずれにも帰属しえない種類の力を備えた意味を与えるのです。²

(訳書, pp. 92-93)

しかし、ここで注目したいのは、「主意」と「媒体」の「相互作用」というアイデアそのものではない。「主意」と「媒体」については後でふれなければならないが、Lakoff and Turner (1989, pp. 131-135) も一節をあてて論評しているアイデアについて、いま語るつもりはない。ここで取り上げたいのは、相互作用説を展開した『新修辞学原論』においてリチャーズが提示している、メタファーと類似の関係に関する彼の見解である。³ 同書第V講を、リチャーズは次のことばで始めている。

「隠喩を駆使することは、何にもまさる重要なことである」と述べたのは、誰だろう、アリストテレス（『詩学』）その人です。ところが、かれは語をついで「こればかりは他人に伝授することができない。それは天才のしるしである。というのは、よい隠喩を作るには、類似を見抜く眼識がなければならないからである」という。（中略）しばしこれを問題とするならば、意地悪い見方かもしれないが、そもそもの出発点からして、おどましくもみつつの憶説が伏在するのを発見できます。⁴

[強調は芝原による] (訳書, p. 82)

リチャーズの言う「みつつの憶説」とは、石橋氏の訳文を利用しつつ書けば、次のとおりである (訳書, pp. 82-83)。

- (1) a. 類似を見抜く眼識 (an eye for resemblances) は、ある人々はもっているが、他の人々はもっていない。
- b. 類似を見抜く眼識は、他人に伝授 (impart) できない。したがって、隠喩駆使能力 (a command of metaphor) も、他人に伝授できない。
- c. 隠喩は、一種特別な例外的言語使用であり、言語の正常な活動様式からの逸脱である。

リチャーズによれば、隠喩の研究が「もろもろの研究のうちで当然占めるべき位置を占めることを妨げ、かつ理論と実践において、それに開かれた道を進む

ことを妨げてきた」のは、このような「憶説」(assumptions)にはかならないというのである(訳書, p. 81)。

(1a-b)に対するリチャーズの見解は、(2a-b)である。また、(1c)に対しては(2c)の見解を彼は提示している(訳書, pp. 82-83)。

- (2) a. われわれはみな、類似を見抜く眼識をもっていればこそ、生きてもらわれるし、話もできる。
- b. 類似を見抜く眼識、隠喩を駆使する能力は、他人に伝授できる。
- c. 隠喩は、言語の自由な活動のすべてに遍在する原理である。

これを見ると、隠喩と類似の関係に関するリチャーズの見解をさらに確かめたくなる。リチャーズが理解したアリストテレスは、「よい隠喩を作るには、類似を見抜く眼識がなければならない」と言った(cf. Nöth, 1985, n. 1)。これについて、リチャーズはどのように考えたであろうか。

(2)を見るかぎりでは、リチャーズは問題の言説そのものに異を唱えたわけではないように思われる。2ページの引用文を参照しつつ(1)と(2)を比較すると、この思いはいっそう強くなる。しかし、隠喩と類似の関係にかかわる彼の見解は微妙である。

リチャーズによれば、隠喩は次の二種に大別される(訳書, p. 108)。

- (3) a. 主意(tenor)と媒体(vehicle)との間にある直接の類似によって働くもの。
- b. 両者に対して(しばしば、偶然の無縁の理由によって)われわれのとる、ある共通の態度によって働くもの。

「主意」と「媒体」は、リチャーズによれば、「固有観念」(original idea)と「借用観念」(borrowed one)、「実際に言われ、または考えられている事」(what is really being said or thought of)と「たとえられている事」(what is compared to)、「背後の観念」(underlying idea)と「想像された性質」(imagined nature)などの「不便な説明語」を不要にする術語であるという(訳書, p. 89)。Othello, IV.2.49

から引いた下の(4)では、「貧苦」(poverty)が主意、「オセロが浸されるべき海または槽」(the sea or vat in which Othello is to be steeped)が媒体(訳書, pp. 96-97)であり、テムズ河に寄せる思いを歌った John Denham の詩から引いた(5)では、河のようでありたいと願った詩人の「心の流れ」(the flow of the poet's mind)が主意、河が媒体であるとされている(訳書, pp. 111-113)。

(4) Steep'd me in poverty to the very lips

[天が] 私を口まで貧苦の淵に浸した [なら]

(5) Though deep, yet clear; though gentle, yet not dull; Strong without rage;
without o'erflowing, full

深けれども清澄に、静かなれども不活発ならず、強けれどもたけからず、あふることなく、充ち満てり。

隠喩と類似性の関係について言えば、(3)に挙げた二つのタイプの隠喩のうち、リチャーズが力をこめて語るのは、bのタイプである。

われわれがふたつの物を両方とも好むということが、ある意味では、そのふたつの物が分けもつ共通の性質ですが、同時に、われわれは、両者が全く異なるものであると認めようとしているかもしれません。わたくしが煙草と論理を好むとしても、それは決してそれらが共有する、きわめて明白な特性 [very obvious character that they have in common] ではありません。⁵ (訳書, p. 109)

実を言うと、これは、(3)の区別は「窮極のもの」でもなければ「これ以上分解できぬというようなもの」でもないとして断った直後の発言である。したがって、リチャーズの直接の意図は、すぐ後でも繰り返し述べているように、(3)の区別が「徹底的なもの」ではないことを示すことであったと思われる。しかし、上の引用文を読むと、そのような意図よりも、(3b)のタイプの隠喩に対するリチャーズの肩入れの気持ちを、強く感じる。

(3b)のタイプの隠喩といえども、主意と媒体に対して我々がとる「共通の態度」によって働くのであれば、類似によって働いていると言ってならない理由はない。しかし、リチャーズは、その類似が「主意と媒体との間にある直接の